26

小坂元祐の経穴学

加畑　聡子
二松学舎大学大学院文学研究科 博士前期課程

【はじめに】小坂元祐（生没年不詳）は，江戸後期の幕府官立医学校・江戸医学館における経穴学の講師であり，代表的著作『経穴簒要』は原南陽『経穴彙解』と並ぶ江戸期の鍼灸書として知られている．小坂の来歴や学統については，これまであまり論じられてこなかったが，彼の活動及び著作は江戸後期の公教育としての経穴学，すなわち鍼灸学の実態を知る上で重要であると考える．従って，本研究は小坂の著作及び彼が入門し講師を務めた躋寿館や江戸医学館関連資料の調査により，江戸後期の鍼灸経穴学の意義やその背景を知る手立てとしたい．

【来歴】『兪穴捷径』岡田維方順益跋文によれば，小坂は代々医を業とする家であった．また杏雨書屋蔵『玉池・藍渓・桂山先生門人帳』によると，躋寿館時代に多紀蘭渓に入門した記録があり，『経穴簒要』片倉元周序文から，片倉の入門時期「宝暦十二壬午五月十参日」（1762）とほぼ同時期であったと推測できる．『経穴簒要』多紀元簡序文に入門時期を「若干年」と記される当時，小坂は既に松平紀伊守（信彰）に仕え，丹波亀山藩医であった．また広島大学所蔵『躋寿館規則』によれば，寛政辛亥（1791）には「取経挨穴」講師として名を連ねており，躋寿館時代には既に経穴学の講師であったことがわかる．『経穴簒要』丹波元簡序に，小坂の経穴学は，宮本春仙，多紀玉池，中島元春，藤井貞三，大膳大夫良益，元祐の順に伝授されたと記され，その学統を知ることができる．『刺灸必要』凡例に小坂の門人と思われる谷其章が「先師亦可無遺憾于地下也」と記すことから，文化丙子（1804）には既に小坂は死去していたと推測できる．

【著作】著作には，『兪穴捷径』（1793年序刊），『十四経全図』（1812年序刊），『経穴簒要』（1810年序刊），『刺灸必要』（1816年序刊），『針灸備要』（刊年不詳）が挙げられる．その引用書に，『経穴簒要』に九十五部，『兪穴捷径』に二十部の書名がみられるが，いずれにも元・滑寿（1304–1386）著『十四経発揮』が見当たらないことに注目したい．というのも，『十四経発揮』は再版を繰り返し，江戸期には広く読まれた一般的な医書であったと言えるからである（小曽戸洋著『日本漢方典籍辞典』所収「和刻漢籍医書出版年表」）．以下，小坂が該書を引用しなかった理由を自序に基づいて考察する．

『兪穴捷径』自序に「特滑寿十四経発揮専行于世」とあり，『十四経発揮』が世に流布していた背景を前提にして「今参考諸書補発揮所脱漏之穴，然後気府論所謂気穴参百六十五之数，始得全矣」と述べ，『十四経発揮』の脱漏した経穴を指摘し，その上で『素問』気府論に従い補っている．

『経穴簒要』自序にも「古昔論経絡者，雖極衆多，其要皆本於素霊矣．而素霊之為書幽遠簡古，多不可得而通暁者，則其本之之論，亦多不可得而通暁者，則固矣……世人多以滑伯仁十四経発揮為便」とあり，多くの医者が『素問』『霊枢』を通暁せずに『十四経発揮』を用いて簡便に経穴を体得することへの疑問を呈しているように解釈できる．

また『経穴簒要』自序に「亦復自親解剖所視内景与古人所説異者，今新図之以示四方，併為五巻，名曰経穴簒要」とあることから，自ら人体を腑分けして内景図を作成していたことがわかる．これは巻之四に収録されている．

このように，小坂の活動には当時通行していた簡便な経穴書に基づく経穴学に対する疑問が根底にあり，その在り方を改善するべく，種々の古医書を用いた経穴書の考証や，腑分けに基づく内景図作成を行ったと考察する．この取り組みには，古医書への復古を基軸とした経穴学再考証の試みが表れていると感じられる．

本研究は，武田科学振興財団，2010年度杏雨書屋研究奨励「江戸医学館を中心とした近世後期の医学公教育の形成」の一部である．